

## 資 料

## 認知された自己の諸側面の構造

山本 真理子\* 松井 豊\* 山成 由紀子\*\*

## 目 的

人が自分というものを意識する時には、「自分が好きだ」「自分に自信を持っている」などのように漠然と全体としてとらえられる自己への意識だけでなく、「自分はスポーツに優れている」「自分は人に対して優しくない」などのように自己を構成する諸側面に分かれた認知像も意識されているであろう。言い換えるなら、自己への意識（自己概念）は、自己全体に対して向けられる評価と、さまざまな側面から構成される自己の認知像とに分けて整理することができよう。この自己全体への評価（以下では、「自己評価」と表記）と自己を構成する諸側面の認知（以下では、「自己認知の側面」と表記）の両者は、自己を1つの特殊な態度対象とみる立場における（Rosenberg, 1965）、態度の感情成分と認知成分とに対応するものと言える。

自己認知の側面の内容については、これまでにもいくつかの研究がなされており（Bugenthal & Zelen, 1950, 宮沢, 1976 など）、認知された自己像についての具体的な側面の検討が行われている。しかし、これらの研究では、得られた側面が列挙されているにとどまり、側面間の相互の関係やその重要度の検討は行われていない。

しかし、自己認知の諸側面の中には、中心的な働きをする重要な側面と、そうでない側面とがあるであろう。その側面の認知の仕方によって、自己評価が決定されてしまうような重要な側面と、その側面の認知の仕方がどうであれ、自己評価には大して影響のない側面とを、同等に扱うことはできない。自己概念のあり方を構造的に検討するためには、自己認知の側面をただ列挙するだけでなく、自己評価との関係から、自己概念の構造の中の各側面の重要度を明らかにする必要がある。

このように、自己概念を自己認知の側面と自己全体への評価に分けて整理することにより、自己概念の構造がより明確に把握されると考えられる。そこで、本研究で

は、自己認知の側面と自己評価との関係を分析し、認知の各側面の重要度を検討することを目的とする。

ただし、自己概念のあり方は、男女によって異なっていると考えられる。高橋(1975)は、自分の性の認知（性認知態度）を分析し、自己像の発達の仕方に性差があると報告している。また、梶田(1980)は、男子の自己意識では「自己へのまなざし」が大きな広がりを持っているのに対して、女子では、「他者からのまなざし」もともと自己意識の中核をなしていることを示している。上記の研究知見から考えれば、本研究で扱う自己概念の構造にも、大きな性差があることが推測される。そこで本研究では、自己についての認知側面と自己評価との関係について、性差の検討を中心に行うこととする。

## 方 法

大学生を対象にして、自己認知の諸側面と自己評価を測定するために質問紙調査を行った。

## 自己認知の諸側面に関する項目の選択

自己認知の測定項目を作成するにあたって、大学生の生活感情に即し、性格や内面的資質だけでなく性的行動や所有物などの広い範囲にわたる多くの側面を含むように配慮した。まず筆者を含めた心理学専攻者6名が、大学生30名に面接し、「自分の自信のあるところ」などを尋ね、自己認知の側面に関連する表現や文章を収集した。次に、加藤・高木(1979)などこれまでの研究で得られている自己認知の領域や、使用された質問項目を収集した。これらの資料に基づき、自己認知の側面としてTABLE1に示す12の側面を仮説的に設定した。

この仮説的側面に準拠して、自己の特徴や評価を表わす短文を作成し、各側面を代表する項目の数に偏りがないよう留意して、78の質問項目を選定した（項目の例はTABLE2参照）。

## 自己評価の測定尺度

自己評価を測定する尺度として、自己全体への感情的評価を測っているRosenberg(1965)のSelf Esteem Scaleの10項目を翻訳して使用した。この尺度は主成分

\* 東京都立大学  
\*\* 学習院大学

TABLE 1 質問紙構成の枠組となった自己認知の諸側面と各側面に該当する質問項目数

側 面 名		項目数	
外 面 的 側 面	A 外 見	身体的特徴	6
		雰囲気・印象	7
		服装・その他	4
	B 社 会 的 背 景	5	
C 資 産・経 済 力	4		
能 力 的 側 面	D 知 性	5	
	E 運 動・体 力	4	
	F 社 交	会話力	3
		指導力その他	5
	G 性 的 能 力	4	
	H 特 技 や 資 格	5	
	I そ の 他 の 能 力	4	
内 面 的 側 面	J 生 き 方	3	
	K 人 格	意欲性・活動性	4
		誠実さ	3
		暖かさ・明るさ	4
		几張面さ他	5
	L そ の 他	3	

TABLE 2 自己認知の諸側面の因子分析（因子負荷量の高い項目）

因子名（相対寄与率）	項目の概略（仮説側面 <sup>注</sup> ）	因 子 負 荷 量
1. 社 交(6.5%)	社交能力に自信(F)	.703
	交際範囲が広い(F)	.687
	異性と気楽に話せる(F)	.670
	異性の誘い方がうまい(G)	.578
2. スポーツ能力(5.7%)	体力に自信(E)	.834
	運動神経が発達(E)	.796
	スポーツマンにみえる(A)	.755
	得意なスポーツがある(E)	.717
3. 知 性(4.5%)	知的能力に自信(D)	.730
	物事を知っている(D)	.680
	頭の回転が速い(D)	.645
4. 優しさ(4.4%)	思いやりがある(K)	.707
	人に対して寛大(K)	.630
	おおらかである(K)	.559
5. 性(4.4%)	性的テクニックに自信(G)	.764
	性的能力に自信(G)	.733
	性経験が豊富(G)	.715
6. 容 貌(3.9%)	目鼻立ちがよい(A)	.652
	外見に自信(A)	.627
	顔が気に入っている(A)	.558
7. 生き方(3.5%)	生き方に自信(J)	.715
	個性的な生き方(J)	.618
	自分に自信(L)	.495
8. 経済力(3.1%)	自由な金が多い(C)	.765
	家庭が裕福(B)	.627
	経済面に自信(C)	.580
9. 趣味や特技(3.0%)	趣味に自信(H)	.774
	特技がある(H)	.687
	熱中する趣味がある(H)	.639
10. まじめさ(2.4%)	きちょうめんである(K)	.566
	自分に厳しい(K)	.532
	責任感がある(K)	.490
11. 学校の評判(2.2%)	評判のよい大学にいる(B)	.625
	出身校が有名(B)	.606
	社会的背景に自信(B)	.500

注 記号は TABLE 1 の側面名を示す

実施は、1980年5月上旬から6月上旬までの期間に、各大学の講義室において集団施行された。所要時間は約15分であった。

### 結 果

自己認知の各側面と自己評価との関連を調べるために、本研究ではまず自己認知の各項目を因子分析にかけて、自己認知の側面（因子）を整理した。次に得られた因子毎に尺度得点を算出し、これらの得点と自己評価得点との関係を重回帰分析を用いて分析した。自己概念の性差を検討するために、重回帰分析は男女別に行い、参考資料として尺度得点の平均値を性別に算出し検定した。

#### 自己認知の諸側面の構造

自己認知の諸側面の構造分析を行う為に、78項目の回答を5点法で点数化し、因子分析によって解析したとこ

分析の結果に基づいて得点化された\*。この得点が高い者ほど自己全体を肯定的にとらえ、自己を高く評価していると解釈される。

#### 被験者

東京都内の国公立及び私立4大学の学生644人（男子400人・女子244人）。

#### 実施方法と実施期間

自己認知の各側面を表わす78項目と自己評価の10項目はすべて、自分の特徴や評価を記述する短文で構成され、個々の文章が自分にどれだけあてはまるかについて質問する形式にまとめられた。回答は“あてはまる”“ややあてはまる”から“あてはまらない”までの5件法である。質問紙には回答者の性や学年などの項目も含まれている。

\* 自己評価尺度の項目の内容の整合性を検討するために主成分分析を行った。分析の結果、第1因子の寄与率が43%と高く、第2因子は13%と低いので、単因子構造を成していると判断された。そこで第1因子に負荷の高い(.46以上)9項目を選び、回答を加算して自己評価得点を算出した( $\bar{X}=4.64, SD=5.71$ )。この得点は、得点化に使用した項目と高い相関( $.59 < r < .77$ )を示し、分布は正規分布に適合している( $\chi^2=27.31, df=23, P > .20$ )。

る、TABLE 2 に示す11因子が得られた\*\*。

第1因子は、社交性についての自信や交際範囲の広さなど、人と積極的に関わりをもつ能力に関する項目に負荷が高いので“社交”の因子と解釈される。第2因子は体力や運動能力などに関わる“スポーツ能力”の因子、第3因子は知識の量や頭のよさなどに関わる“知性”の因子と解釈される。第4因子は人に対する思いやりや寛大さなどの人格的側面の中の“優しさ”に関する因子であり、第5因子は性的経験や性的能力に関する“性”の因子、第6因子は顔だちや外見の自信などに関わる“容貌”の因子である。第7因子は自分の生き方に対する自信を示す“生き方”の因子で、第8因子は自分や家庭の財力に関する“経済力”の因子、第9因子は“趣味や特技”に関する因子と解釈される。第10因子は几帳面さや自己に対する厳しさなど人柄の“まじめさ”に関する因子、第11因子は出身校や所属大学についての自信を表す“学校の評判”の因子と解釈される。

以上の各因子に負荷量が高い項目を2～4項目ずつ選び、それらの項目の点数の平均値をもって各因子の尺度得点とした。以下の分析ではこの尺度得点を用いて解析する。

#### 自己概念の性差

男女における、自己評価や自己認知の高さの差を分析した。

まず、自己評価得点を男女別に集計し、平均値の差の検定を行ったところ、男子の自己評価得点( $\bar{X}=5.09$ ,  $SD=5.67$ )は、女子の得点( $\bar{X}=3.90$ ,  $SD=5.69$ )よりも有意に高いことが示された( $t=2.55$ ,  $df=635$ ,  $P<.001$ )。

男女別に自己認知の各側面の因子分析を行った結果、抽出された因子の順序には差異がみられるものの、因子の内容(因子負荷量の布置)はほぼ一致していることが明らかになった\*\*\*。そこで、自己認知の各尺度得点を男

TABLE 3 男女別の各側面の尺度得点の平均と性差の検定

側面	男		女		検定 t (df)
	N	平均 SD	N	平均 SD	
社交	398	3.00 1.04	244	3.22 1.08	2.63** (640)
スポーツ能力	400	3.04 1.11	242	2.60 1.10	4.90** (640)
知性	400	2.99 0.92	243	2.56 0.89	5.81** (641)
優しさ	395	3.49 0.86	243	3.43 0.80	0.99 (636)
性	397	2.19 0.96	244	1.63 0.87	7.50** (639)
容貌	399	2.76 0.95	243	2.58 0.94	2.24* (640)
生き方	399	3.21 1.06	244	2.84 1.08	4.25** (641)
経済力	399	2.54 0.93	242	2.70 1.00	2.10* (639)
趣味や特技	399	3.30 1.11	244	3.02 1.19	3.10** (641)
まじめさ	400	3.44 0.82	243	3.41 0.86	0.39 (641)
学校の評判	400	3.12 1.08	244	3.37 1.10	2.82** (642)

注) \*\*  $P<.01$ , \*  $P<.05$

TABLE 4 自己認知の尺度得点を説明変数にし、自己評価を外的基準とした重回帰分析(標準偏回帰係数と説明変数及び性差の検定結果)

説明変数	男 N=384	女 N=236	t df=327
社交	.157**	.080	1.55
スポーツ能力	.009	.011	<1
知性	.173**	.025	3.15**
優しさ	.103*	.278**	4.42**
性	-.046	-.020	<1
容貌	.161**	.207**	<1
生き方	.197**	.161**	<1
経済力	.065	.162**	1.87†
趣味や特技	.082†	.117†	<1
まじめさ	.078†	.046	<1
学校の評判	.068	.064	<1
R <sup>2</sup>	.429**	.449**	

注) \*\*  $P<.01$  \*  $P<.05$  †  $P<.10$

女別に算出し、平均値の差の検定を行った。結果はTABLE 3 に示すとおりで、“スポーツ能力”、“知性”、“性”、“容貌”、“生き方”、“趣味や特技”の6側面は男子の得点が有意に高く、“社交”、“経済力”、“学校の評判”の3側面は女子の得点が有意に高い。

#### 自己評価と自己認知の各側面の重要度

自己認知の各側面が全体的な自己評価にどのように影響しているかを明らかにするために、自己認知の各尺度得点を説明変数にし自己評価得点を外的基準とする重回帰分析を行った。解析は男女別に行い、得られた説明率(重相関係数の2乗)と各側面の標準偏回帰係数をTABLE 4 に示した。説明率と偏回帰係数の大きさの検定結

\*\* 自己認知の各側面の因子分析は、主因子法で因子を抽出し、異積因子寄与率が66%をこえた21因子(66.9%)をヴァリマックス回転したところ、固有値1.0以上を示した11因子が解釈された。なお、同様の手法で回転する因子数を変えたり、直接ヴァリマックス法を用いて解析してみたところ、上記とほぼ同じ内容をもつ因子が抽出されることが確認された。

\*\*\* 性別に行った因子分析の結果、男子においては順に、“運動”“社交”“性”“容貌”“知性”“優しさ”“生き方”“趣味や特技”“経済力”“自己規制”“学校の評判”の11因子が得られ、女子においては“社交”“知性”“性”“運動”“優しさ”“経済力”“容貌”“趣味や特技”“生き方”“まじめさ”“学校の評判”“センス”の12因子が得られた。

果及び、偏回帰係数の性差の検定\*\*\*\* 結果も合わせて示されている。

2群の重回帰分析の説明率はいずれも40%以上と高く、検定の結果も有意である。これは、自己評価を説明する為に意義のある説明変数が選ばれたことを意味している。個々の説明変数の結果をみると、男女共通して、“優しさ”、“容貌”、“生き方”の3側面の偏回帰係数が有意に高く、自己評価に対してこの3側面の認知が強い関わりを持つことを示している。この3側面の他に、男子では“知性”と“社交”、女子では“経済力”の偏回帰係数が有意であった。性差の検定の結果によると、男子の自己評価は女子に比べて“知性”に関する自己認知との関わりが強く、女子の自己評価は男子に比べて人格の“優しさ”や“家の経済力”に関する認知との関わりが強いことが、明らかにされた。また、“スポーツ能力”や“性”についての自己認知は男女とも自己評価とは関連をもたない。

## 考 察

自己認知の側面を構成しているものとして、因子分析の結果、11の因子が得られた。本研究の結果の特徴として、これまでの研究ではさほど重視されていなかった本人をめぐる背景的な特性(“家の経済力”や“学校の評判”などの因子)が、自己の認知像の側面として整理され、抽出されている点があげられよう。

各側面の認知と自己評価との関係を重回帰分析により求めた結果によると、“スポーツ能力”、“性”、“学校の評判”を除くほとんどの側面が、自己評価の高さと関係を持っていることが明らかにされた。その中でも、“優しさ”、“容貌”、“生き方”の3側面は、男女共通して自己評価と強く関係しており、現代の大学生が自己を意識する時には、この3側面に強い関心が払われていると言えよう。ここに示された3つの側面のうち、“容貌”は自己の外見的側面を表わすものと考えられる。そして、“生き方”が自己認知の内面的側面と、“優しさ”が対人的側面と対応するものとみれば、大学生の自己概念においては、自己の内面的側面、外面的側面、対人的側面のそ

れぞれが、同等に重要な側面となっていると考えられる。

特にここで、“生き方”、“優しさ”などの側面と並んで、“容貌”が自己評価と強く結びついている点が、注目される。青年の劣等感の原因について調べると、人格特性に併せて、必ず、外見的要因が含まれているという報告(例えば、岸田, 1951)などと考え合わせると、青年の自己概念においては、外見的側面も非常に大きな働きをしていると結論できよう。しかし、男子と女子の間には、各側面と自己評価との結びつき方に、さまざまな違いが認められる。

その第1は、他者を意識した側面の重要度の違いである。男子の場合には、自己認知の側面の中で、自己評価の高さに最も強く寄与しているのは、“生き方”と“知性”であり、男子の自己概念には、自己の内面的な資質が最も大きな意味を持っている。それに対して、女子の場合には、“優しさ”と“容貌”の側面が非常に高い重要度を持っている。これらの側面の内容を考察すると、女子の場合には、他者との関わり方の中で、自己評価が決まっているように思われる。梶田(1980)の指摘と同様に、ここでも、他者を意識した側面が女子の場合に非常に重要な働きをしていることが明らかにされた。

第2に、“知性”の関わり方にも性差が認められる。男子では、自分の知的能力への自信が自己評価に大きく影響を与えているのに対し、女子では、知的能力への自信と自己評価との結びつきはほとんど認められない。知的能力への高い評価は、男子の場合には、自己の持つ性役割期待と何の矛盾も起こさずに、自己評価を高めることが予想されるが、女子の場合には、「成功回避動機」(Horner, 1972)として知られるように、伝統的性役割期待と対立してしまう。しかし、拍木(1973)が指摘するように、伝統的性役割に対する女子の態度には分化が存在することが推測される。このために、女子の場合には、知的能力の認知と自己評価との関係は、男子のように一様なものではなく、個人個人における伝統的性役割への態度の違いにより、さまざまに異なっているのであろう。

特徴的な性差として認められた第3点は、“家の経済力”の側面が自己評価に与える影響度の違いである。自分の家の経済力の側面は、男子にとっては自己概念の重要な側面ではないが、女子にとっては重要な側面の1つとなっている。このように“家の経済力”が、女子の場合にのみ、自己を支える主要な要素になっている原因として、2つの解釈が考えられる。第1に、女子の場合には、家族(母親)との情緒的結合が強く(高橋, 1968)、女子の自己概念の中では、家庭全体と自己とが一体化されていることが考えられる。

\*\*\*\* 検定は以下の式によって行われた。  
(奥野他, 1971参照)

$$t = \frac{|b_i - b_i'|}{\sqrt{SB_i}} \geq t(N-P-1, \alpha)$$

$b_i$ ; 男性の  $i$  側面の偏回帰係数

$b_i'$ ; 女性の  $i$  側面の偏回帰係数

$SB_i$ ;  $b_i$  の標準誤差

$N$ ; 男性のサンプル数

$P$ ; 説明変数の数

第2に、家庭の社会的地位や経済力は古くから、女子の結婚の条件として重要視されてきたものであるが、現在でも“男性から選ばれる性”としての立場が、女性自身に強く意識されているとすると、女子青年において自己の価値の評価に家庭の社会的立場が大きく関与していることが考えられる。

以上述べてきたように、自己認知の側面について検討すると、男子では、内面的な資質が自己の重要な側面であり、女子では、対人的な側面や社会的属性などの外面的な側面が重要なものとなっている。このような性差が生まれる背景として男女それぞれが「こうありたい」と自己に期待する理想像に各々の性役割観が大きな影響を与えていることがうかがえる。このことから、今後は、自己概念の構造と性役割観に関する検討を行いたい。

〈付記〉

本論文をまとめるにあたって、東京都立大学の詫摩武俊先生、学習院大学の永田良昭先生、篠田彰先生、筑波大学の堀洋道先生に、御指導と御助言をいただきました。また、学習院大学の宮田和美さんにお手伝いいただきました。厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- Bugenthal, J. F. T. & Zelen, S. L. 1950 Investigations into the self-concept I: The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.
- Horner, M. S. 1972 Toward an understanding of achievement related conflicts in women. *Journal of Social Issues* 28, 2, 157-175.
- 梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 拍木恵子 1973 現代青年の性役割の習得 現代青年の性意識 (依田新他編) 第3章 現代心理学講座第5巻 金子書房
- 加藤隆勝・高木秀明 1979 青年期における自己概念の発達の変容(1), (2) 日本心理学会第43回大会発表論文集
- 岸田元美 1951 児童における劣等性意識とその要因 児童心理 5(9), 66-75.
- 宮沢秀次 1976 青年期の自己概念に関する研究(1) 日本教育心理学会第18回総会発表論文集 242-243.
- 奥野忠一・久米均・芳賀敏郎・吉澤正 1971 多変量解析法 日科技連
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Press
- 高橋恵子 1968 依存性の発達の研究: I 大学生女子の依存性 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高橋美津子 1975 青年前期における性意識と自己像—性認知態度と自己像間差異との関連—, 日本教育心理学会第17回総会, 254-255.

(1981年11月9日 受稿)